



丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～

第6回

留岡幸助牧師

今回は、友金(辻原)光治が洗礼を受けた留岡幸助牧師について見ていきます。

留岡幸助(一八六四～一九三四)は、岡山県高梁出身、同志社で新島襄の薫陶を受け、卒業後の明治二十一年(一八八八)から丹波第一教会の第二代牧師として伝道に奔走しました。

その後北海道へ渡り監獄改革に取り組み、アメリカ留学などを経て東京と北海道に少年感化院「家庭学校」を創立するなど、社会福祉の先駆者として代表的な人物で、「岡山四聖人」の一人とも称されています。



留岡幸助(1864～1934)

田舎牧師として

留岡は二十一年六月に同志社を卒業、九月から堀貞一初代牧師の後任として丹波へ赴任します。そして、二年半、丹波地方の伝道に尽くしました。

最初は園部を拠点として南丹(亀岡・船井郡)を中心に伝道し、二二年に結婚、三年五月から妻夏子とともに福知山に居を移し綾部・福知山へ活動を広げます。

丹波での説教の様子が次のように伝わっています(室田保夫「留岡幸助の研究」)。「高潮に達して手を振り卓を叩いて論ずるに至るや、我もなく客もなく、一語一句重みと渋みを加え、お国なまりで弁じ立て、全く無我三昧の状態にて説いたの

で、聴衆も皆共に酔い、説き終わりに彼我共に溜息を吐くという有り様で、一人の野次るものなく、妨害するものなく、わかってもわからんでも皆よく聴いたもので、知識階級の者ばかりでなく、いわゆる田夫野人も皆感じ入りて聴いた」

また『一路白頭ニ至ル―留岡幸助の生涯』(高瀬善夫 岩波新書)には留岡と新島襄の対話場面が出てきます。「君はいつたいどんなふうに伝道活動しているのかね」

「はい、北は福知山、綾部、南は園部、亀岡に至るまで、六つの講義所を一人で担当し、二十余里の道を歩いています」

「それは大変だ。誰かに馬を寄付してもらいたまえ」彼はその言葉をありがた

く拝聴して引き下がった。馬があれば二十里の行程が楽になることは、だれにもわかる道理である。しかし毎日馬に食わせるかいばに事欠くようではどうするのか。先生は情熱の人であるが、どうも経済思想に欠けている。

丹波を去り北海道へ

やがて留岡は惜しまれつつ北海道へ去ります。留岡には学生時代から監獄改良に対する強い思いがあり、恩人である金森通倫(かみもりつぐん)牧師から推薦されたのがきっかけとなり、二四年二月教会へ辞表を提出します。教会側ではこの有為な青年牧師を引き止めようと必死に慰留しましたが、留岡の意志は固く、ついに辞職を承認しました。出発に当たり留岡は、三

月一七日の福知山を皮切りに二六日の亀岡まで各地をまわり、信徒たちに別れを告げました。

三月二十日、前夜「涙眼涙滴」の送別会が開かれた。田野村(綾部)から松山まで送ってもらい、中川道之助宅で九時まで送別会、集まる者二四、五名。二一日は豊田を経て須知明田吉五郎宅に入り、青年会演説会。二二日、九時より胡麻会堂で妻と共に一四、五名と送別会。三時過ぎ須知に帰り、会堂で送別会、二十余名。讚美歌、祈祷、明田吉五郎の「懇切ナル謝辞」、谷平吉の「短辞」があり、「皆心腸ヲ折ランバカリナリ」。二三日、午後三時須知を出立、園部の村上太五平宅へ。

(『開拓者と使徒たち』) その後二六日までかけて

大戸、船枝、熊原、氷所、亀岡とまわり、二七日、老ノ坂手前の王子村まで人力車で送ってもらって京都へ入り、五月に空知集治監(現旭川市)に着任しました。

空知集治監には約二千七百人の囚徒がいました。多くの者が鉄鎖を引きずりながら炭鉱労働や鉄道建設に使役されており、事故も多発していました。留岡はキリスト者としての強い使命感でこれに立ち向かいます。

囚徒一人一人と膝を交える「密房教誨(個別面接)」を重ね、その経験から犯罪の原因が年少期における家庭と教育の欠乏にあると痛感した留岡は「感化事業」への思いを強くしていきます。感化事業とは、犯罪や不良行為を犯した青少年やその

恐れのある者たちを保護し、環境を改めて矯正教育を行う事業です。留岡は監獄学や感化事業について専門的に学ぶため二七年(二八九四)、先進地アメリカへ渡ります。

二九年五月、約二年間の研鑽を終えて帰国した後は、霊南坂教会(東京)牧師や「基督教新聞」の主筆を兼務しながら感化院設立に奔走し、三二年(二八九九)、ついに巢鴨村(東京渋谷)に「家庭学校」を設立します。

さらに大正三年(一九一八)には「天然の感化力」を求めて北海道社名淵(遠軽町)に分校と農場を設立。同校は北海道家庭学校として現在に至り、同地は「留岡」という地名になっています。亡くなったのは昭和九年(一九三四年)二月。東京の自

丹波との深いつながり

留岡と丹波の交流が途絶えることはありませんでした。三七年九月の丹波教会創立二十年祝会には招かれて「悠遠の事業」と題する演説を行いました。大正七年には郡是の波多野鶴吉の葬儀に参列して感話を述べ、同八年には園部の井上半介建碑式に列席しました。

『開拓者と使徒たち』には留岡は「牧師の経験は丹波教会だけだったから特に丹波教会が忘れられなかったものか、関西へ来るたびに丹波を訪れた」とあります。

一方、丹波からも留岡を慕って北海道へ渡る者や留岡の事業に協力する者が続出しました。田中敬造(綾部)、小北寅之助・甚之助(弟(亀岡)、西田新蔵(胡麻)、

前田英吉(須知)、山内成太郎(保井谷)らは、いずれも丹波の中心的な信徒でしたが、皆一家を挙げて渡道しました。小塩高恒(綾部)は巢鴨家庭学校で働き、後に副校長となりました。谷平吉(須知)も一時教師として家庭学校に招かれました。

多岐に渡る留岡の活動は本稿では紹介しきれませんが、興味のある方は前掲書のほか『留岡幸助著作集』(全五巻)や『留岡幸助日記』(全五巻)があります。留岡を描いた映画『大地の詩』(二〇一一年山田火砂子監督、留岡・村上弘明、妻夏子・工藤夕貴)もあります。前掲の『留岡幸助の研究』の著者室田保夫氏は、京丹波町中台出身で関西学院大学名誉教授。瑞穂中や須知高校で筆者らの一年先輩です。(山下幾雄)